

山田みやこの活動報告

令和4年1月29日(土)

ヤングケアラーと官民連携的那須塩原市ヤングケアラー協議会の取り組みについて

講師 仲田 海人氏(那須ヤングケアラー協議会 作業療法士)

仲田氏は小学校高学年時代からきょうだいヤングケアラーを経験、任意団体「とちぎきょうだい会」を立ち上げた。

1. きょうだいヤングケアラーとは

ケアが必要なきょうだいを家族の様々な理由でケアを担うヤングケアラー。自分も成長過程の子どもなのに親の代わりのような存在になっている。

家族で出かけることもなくなり、勉強で友達と比べて不公平とっていた。医療・福祉に繋がっていたがなかなか良い支援に巡り合えずにいた。

精神障がい姉は自宅か病院の選択だった。姉が長期入院中、病院や施設に本音を言えないなど、第三者のいない閉鎖的なものを感じ、4年間かかったがグループホームに入所。

父は56歳で令和3年4月に神経難病の多系統萎縮症が発覚。20代にしてダブルケアの状態(姉と父のケア)

2. 国のヤングケアラー調査から

中学2年生と全日制・定時制の高校2年生相当の子どもが世話をしている家族は圧倒的にきょうだい(40～60%)。ヤングケアラーとして中学2年では70%、高校2年では50%が当事者自覚なし。背景には「当たり前」の感覚

ヤングケアラーの子どもたちは宿題や勉強の時間がとれない、睡眠が充分にとれない、友達と遊べない、進路の変更など、できないことが多い。困っていても現状を受け入れ、頼っていいことを知らない。また頼っても対応してもらえないと思っていない。

ヤングケアラーが相談できるようになるには、大人の対応姿勢が変わること、「相談してみよう」という大人が周りにどれだけいるか。

3. 支援方法

○障害を抱える家族がいる場合のヤングケアラー

既存の障害福祉を介護福祉サービスの見直し→訪問看護、成年後見人

家族で抱えないための住居支援→グループホーム

経済的支援→障害年金、生活保護(単身)

○若い兄弟のケアをしているヤングケアラー

発生する背景はひとり親・兄弟が多い・夫婦共働き・ネグレクト・兄弟の年齢が離れている・親戚を頼れない等。

群馬県高崎市では来年度から中高生のヤングケアラー家庭に民間ヘルパー2人を1日2時間、週2日まで無料で派遣する取り組みを開始。予算1億円

○親や家族が日本語を話せない場合のヤングケアラー

子どもが通訳として仲介する背景がありうる

家庭内の意思疎通、親戚の来日、行政機関に同伴

本人の言語発達、日本と家族文化の違い

各相談窓口にて言語翻訳のアプリなどの導入

○アルバイトをして生活費を稼いでいるヤングケアラー

背景は高校生・大学生で働ける年齢・家庭にお金はあるけど親との折り合いが悪い、貧困、通学費確保等。ヤングケアラー向けの給付型奨学金か、無利子型奨学金を制度化してほしい。

☆那須塩原市ヤングケアラー協議会での取り組み

母体は「にしなすケアネット(地域包括ケアシステムを構築するために行っていた取り組み)」

主な活動は

①市民への啓発

実態を把握し頼り先があること、気持ちを話せる場があることを本人や家族、その周りの人たちに伝えていく

②相談体制、サポート体制の構築・強化